

## 宮崎汎会員の隨想「忘れ得ぬ労使の人々」番外編16話

「ネクタイピンじゃ飯は食えないよ！」大来佐武郎 外務大臣、国際エコノミスト

昭和30年3月わが国の生産性向上運動は閣議決定によって始まった。その関係であろうか当時の日本生産性本部の幹部職員は、通商産業省・労働省・経済企画庁・農林省など省庁出身者が多かった。

私の上司は経済企画庁のリサーチャーで「経済白書」を執筆していた文章の達人で、大来佐武郎氏の薰陶を受けた才人である。

日本人が敗戦の苦難から抜け出し、ようやく国民は生活にゆとりを持てるようになったころ、時の総理大臣は安倍晋三元首相の祖父にあたる岸信介首相から池田隼人首相に政権が移ったところで、日本中に旺盛な活力が満ち溢れていた時代である。

池田内閣は“所得倍増計画”という大きな花火を国民の前に打ち上げた。

新聞に報じられた時には、巷はこの話題で持ちきりとなり、私も“えっつ！給料が倍になるのか”と思わず頬がゆるみ、自分の未来がバラ色に染まり、まず家を買おうか、いやその前に嫁を貰わねば・・・など人生の夢が際限もなく膨らんでいったものである。

かつて政策で国民にこれほどアピールしたものがあったであろうか。その所得倍増計画は池田内閣の時に通称アンポン（経済安定本部）で作成されたもので、計画立案の立役者こそ大来佐武郎氏なのである。



中央大来三武郎氏

大来氏は経済企画庁を退いた後、大平正芳総理大臣のもとで外務大臣まで上りつめた。

当時我が国を取り巻く国際環境は“貿易自由化問題”や、アメリカを中心とする自由主義諸国とソ連を中心とした社会主義諸国が対立し、いわゆる“東西冷戦問題”が私たちの前に横たわり、国民にとっての常なる関心事であった。

大来氏が外務大臣を退いた直後のことである。企業の経営幹部を対象とした“海外事情解説セミナー”を日本生産性本部が企画し産業界に広く参加を呼び掛けた。

講師には前外務大臣の肩書を持つ大来佐武郎氏が最適任ということになり、氏と子弟の間柄にあった上司が講師をお願いしたいと懇請した承頂いた。

同氏の講演は、国際社会の中におけるわが国のとるべき道筋は如何にあるべきかについて、淡々とではあるが熱弁をふるわれた。

講演が終わり応接室で、私も末席に連なり氏に質問をぶつけたのであるが、若造に対し生真面目に数字をいくつもあげながら嫌な顔をせず実に丁寧に応じていただいたのである。

氏は大柄で押し出しも立派で国際人として恥ずかしくない風格を備えておられ、人間見てくれも大事だと大来氏を見ながらしみじみ感じたものである。

控室をノックし会計担当が講師謝金を持ってやってきた。余談だが日本生産性本部は講師謝金の安いことで、よくNHKとともに“薄謝協会”と揶揄され、週刊誌の記事にもなったことがある。

会計担当者は「先生、誠につまらないのですがお納めください」といった。上司も私も「おや？」と互いに顔を見合せた。謝金を“つまらないもの”といったことに違和感を覚えたのである。

会計担当が袋から取り出したものは見慣れた“銀座和光”的包み紙である。

受け取った大来氏も一瞬戸惑われたが、包装紙をその場で丁寧に剥がされ中身を取り出した。中から出てきたのは銀色に光るネクタイピンであった。

大来氏はしばらく眺めていたが、低い声で「きみ、ネクタイピンじゃ飯は食えないよ」とつぶやいたのである。上司も鼻白んだがすかさず「大来さん、それは記念品です。謝金は後程銀行振り込みとさせていただきます」とフォローしたのである。大来さんもにやりとして、「よろしく」といった。

氏を送りだした後、上司は会計担当を呼び「どうして謝礼にネクタイピンなど渡したのか」と問い合わせた。すると彼は「外務大臣まで務めた著名な方なので、わずかの現金をお渡して、しかもその場で領収書を書いていただくのは失礼で申し訳ないと思い、考えた末に和光の品ならばと思い判断しました」と頭を下げたのである。

講師謝金に関しては様々なエピソードがある。話が横道にそれるが触れてみたい。

売り出し中の本がバカ売れして名を売ったY学者に講師依頼をした。会場や参加者のレベル、テーマなど電話でこまごまと尋ね日時を確認し「判りました。伺いましょう」と引き受けてもらった。

ほっとして電話を切ろうとすると「ちょっと聞きたいが？」「謝礼は幾らかね？」「ハイ、はなはだ些少ですが二時間で税込三万円を用意いたしております」「そうかね、ちょっと待てよ、すまんがスケジュールがその日は詰まっていたよ」「そうですか先生にはぜひお願ひしたいと思いますので、いつごろなら予定していただけますか？」「うーん。僕は最近忙しくてね。一年先かな、またにしてくれ」といって電話は一方的に切られてしまった。

テレビへの露出度も増え、著作が大評判となっていつの間にか謝金の多い少ないでしか動かなくなってしまったのである。

“薄謝協会”的依頼を断っても、先生にとっては痛くもかゆくもないことだが・・・お願いした側にとっては、断られた腹いせもあり、金でしか動かない先生、守銭奴と大先生を大いに謗ったものである。

K大学の売れっ子の経済学者M先生が講義を終えて控室に戻ってきた。生産性本部の事務局員が封筒に入れた講師謝金をちょうど講師に手渡したところである。そこへ聴講生の一人が「先生ご無沙汰しています、先月結婚しました」と言いながら部屋に入ってきた。話しぶりからすると先生のゼミのOBである。するとM先生は「そいつはめでたいな。おいこれは祝いだ。どうせたいして入ってないが、俺の気持ちだ」と、まだ封の切ってない講師謝金の入ったままの封筒をポンと机の上に投げ出したのである。中の小銭がチャリンとなった。

見ていた私は売れっ子の立派な新進気鋭の学者と思っていたがその品性のなさ、礼儀にかけた仕草に思わず嫌悪感を強くしたものである。

生産性本部の専務理事に呼ばれていくと宛名は郷司専務理事殿となっている白い封筒を渡され「読んでご覧」と言われ達筆な文字を目で追った。そこには生産性本部は女性が講師に謝金を渡すのか？なぜ男性がきちんと頭を下げ謝金を渡さないのか。誠に無礼で不愉快であったと認められていた。

私は専務理事の顔をみた「まだ世の中には男尊女卑、己の自尊心の強い人がいるのだ。まあ気を付けようがない難しいケースだけれど、礼儀として失礼を詫びるという趣旨で返事を書いてくれ、私の名前でな」。

1963年のことである。まだ男尊女卑のしがらみが残っていたころの話である。日本にも男尊女卑、これが当たり前という時代が長く続いたことを思い出した。

人間だれしも間違いはある。香典などでも数ある中には時々現金を入れ忘れて封筒だけのことがある。私の同僚が講師に謝金の入った封筒を渡した。「先生、中に領収書を同封してあります。恐縮ですがサインをお願いします」と断って席をちょっと外した。戻ってくるや講師が「中身を確かめたがキャッシュは入っていないよ。明細と領収書だけだね」「いや先生現

金は間違いなく入れたはずですが・・・」「キミは何を言っているのかわかっているのかね！もういい。サインだけしよう」と領収書に名前を殴り書きして物も言わずに帰って行ってしまった。

そこへ庶務担当の女子職員が駆け込んできた。「すみません。お金を入れるのを忘れまして領収書だけ入れてしまって・・・ごめんなさい」。

大来氏のネクタイピンの話から脱線したが、お金がまつわると人はつい本性をむき出してしまい、品性が露わになるような気がしてならないのである。お金は怖い。